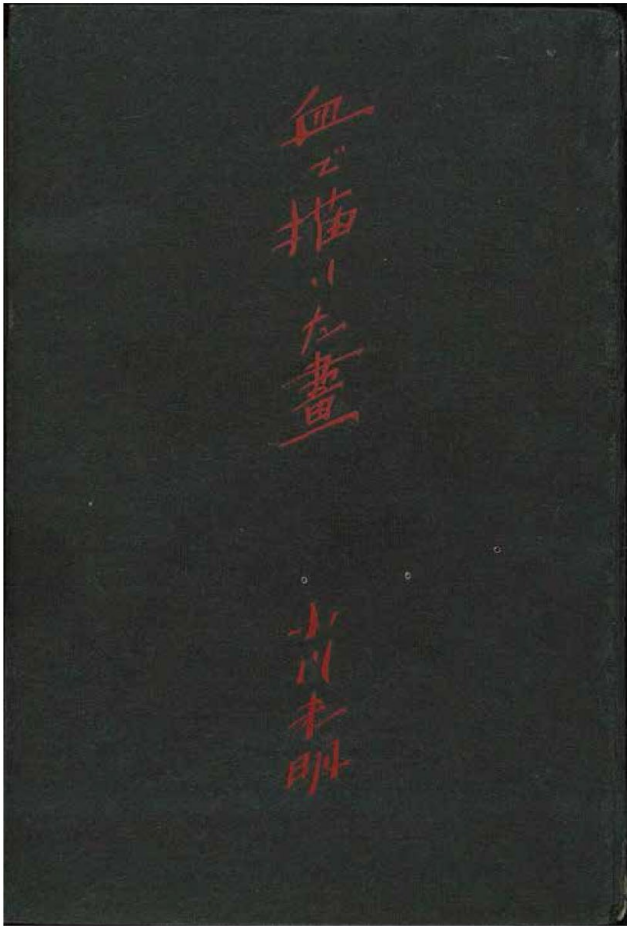


小説集『血で描いた画』～大正中期のピーク～



小川未明の小説集『血で描いた画』は、大正7年(1918)10月、新潮社より刊行されました。定価は1円20銭。本の大きさは、ハガキのサイズより一回り大きい程度です(112mm×160mm)。題字ならびに署名は、未明自身の手によるものと思われます(画像参照)。つや消しの黒表紙をえぐるように刻まれた、赤字の鋭い筆跡が、この本にこめた未明の強い覚悟を示すものとして印象的です。

総数430頁のこの小説集は、次の10編の小説で構成されています。(括弧内は初出誌に関する情報です。)

「戦争」	(「科学と文芸」大正7年1月)
「顔の恐れ」	(「新小説」大正7年3月)
「河の上の太陽」	(「早稲田文学」大正7年5月)
「呼吸」	(「早稲田文学」大正5年4月)
「文明の狂人」	(「文章世界」大正7年4月)
「靴屋の主人」	(「新潮」大正7年4月)
「無籍者の思ひ出」	(「早稲田文学」大正7年1月)
「嫉妬」	(「黒潮」大正6年3月)
「死の鎖」	(「早稲田文学」大正6年4月)
「悪人」	(「太陽」大正6年2月)

表題の「血で描いた画」という小説はありません。未明は以上10編の小説の総題として、このタイトルをつけたわけです。——血で描いた画。それは、

どのような内容を指して言ったものでしょうか。

「戦争」では、第一次世界大戦中、ヨーロッパで多くの死者が出ているにもかかわらず、それに関心をもたない周りの人間を非難しています。当事者のいたみ、苦しみを自分のものとしなない人間のエゴイズムを批判し、あわせて正義の主体となることを訴えています。「文明の狂人」は、醜い社会を変えようと独りで立ち向かっていった主人公が、神経衰弱にかかり、やがて狂気にいたる話です。「靴屋の主人」では、靴の修理代を受けとりに行った男が、社会の階級の重圧にいたたまれず、その場から逃げ出してしまいます。「無籍者の思ひ出」「死の鎖」「嫉妬」「悪人」は、いずれも人間の心の裏側にある悪の心を暴きだしています。肉親の中にも、そして自分自身の中にも、残酷な悪魔の神経があること、そして、正義の訴えも階級社会のなかでむなしく挫折におわることを強い怒りの思いをもって表そうとするところに、「血で描いた画」という表題の意味があります。

講談社版『定本小川未明小説全集』第3巻(昭和54年(1979)6月)の「解説」で、山室静は、『血で描いた画』を未明の大正中期の代表的作品のなかでも「ピークともいうべき作品集」と位置づけています。また「芸術的完成度の点からいえば、ややともすれば結実を欠き、拡散しがちな未明の短編ではあるが、この『血で描いた画』には、その欠陥を埋める全力投球的営みもたしかにされている」と述べています。

小説集『血で描いた画』には、のんびりとしたところは少しもありません。現実の中の重いもの、心の中の重いものに迫ろうとする未明の鬼気が読者に伝わり、息づまる思いを抱かせます。しかし、それが社会の現実であり、人間の真実である以上、読者が目を背けさえしなければ、この小説集から多くのことを学ぶことができるでしょう。小説とは何かを考えさせてくれる小説集です